

太平記 卷第十三 龍馬進奏の事

(前略) ある時主上馬場殿に幸成りて、また此の馬を覩覽あ
りけるに、諸卿皆左右に候ず。時に主上洞院の相国に向
つて仰せられけるは、「古、屈産の乘、項羽が駕、一日
に千里を翔る馬ありと雖も、我が朝に天馬の来る事を未
だ聞かず。然るに朕ちんが代に当つて此の馬求めざるに出で
来る。吉凶如何。」と御尋たづねありけるに、相国申され
けるは、「これ聖明せいめいの徳に因らずんば、天豈此の嘉瑞を
降し候はんや。虞舜ぐしゅんの代には鳳凰來り、孔子の時は麒麟きりん
出づといへり。就中天馬の聖代に来る事第一の嘉祥かじょうなり。
其の故は昔周の穆王ぼくわうの時、驥き、たう、驪り、驥くわ、驥りう、
驥ろく、駢じ、駢しとて八匹の天馬来れり。穆王ぼくわう之れに乗つて、
四荒八極しこうはつきよく至らずといふ所なかりけり。ある時西天十万

里の山川を一時に越えて、中天竺の舍衛国に到り給ふ。

時に釈尊靈鷲山にして法華を説き給ふ。穆王馬より下

りて会座ゑざに臨んで、即ち仏を礼し奉つて、退いて一面に

坐し給へり。如來問うて宣く、『汝はいづれの國の人ぞ。』

穆王答へて曰く、『吾はこれ震旦國の王なり。』仏重ねて

宣く、『善哉よいかな今此の会場ゑぢやうに来れり。我治國の法有り、汝

受持を欲せんや否や。』穆王曰く、『願くは信受奉行し

て理民安國の功德くどくを施さん。』爾時そのとき、仏漢語を以て、四

要品えうほんの中の八句の偈げを穆王に授け給ふ。今の法華の中の

經律けいりつの法門有りといふ深秘しんぴの文これなり。穆王震旦しんたんに帰

つて後深く心底に秘して世に伝へられず。此の時慈童じどうと

いひける童子を、穆王寵愛ちようあいし給ふに依つて、恒つねに帝の

傍に侍りけり。ある時彼の慈童君きみの空位くうゐを過ぎけるが、

誤つて帝の御枕の上をぞ越こえける。群臣議して曰く、『其

の例を考ふるに罪科浅きにあらず。然りと雖も事誤りよ

り出でたれば、死罪一等を宥めて遠流に処せらるべし。』

とぞ奏しける。群議止む事を得ずして、慈童を酈県と

云ふ深山へぞ流されける。彼の酈県といふ所は帝城を去
る事三百里山深うして鳥だにも鳴かず、雲暝くらうして虎狼こらう

充满せり。されば仮かりにも此の山へ入る人の、生きて帰る
と云ふ事なし。穆王猶慈童を哀れみ思召しければ、彼

の八句の内を分たれて、普門品ふもんぽんにある二句の偈げを、潛に
慈童に授けさせ給ひて、『毎朝に十方を一礼らいして、此の
文を唱ふべし。』と仰せられけり。慈童遂に酈県に流さ

れ、深山幽谷いうこくの底に棄てられけり。爰に慈童君の恩命に
任せて、毎朝に一反へん此の文を唱へけるが、若し忘れもや
せんずらんと思ひければ、側なる菊の下葉したばに此の文を書
附けけり。それより此の菊の葉における下露したつゆ、僅かに落

ちて流るゝ谷の水に滴りけるが、其の水皆天の靈薬となる。慈童渴に臨んでこれを飲むに、水の味ひ天の甘露の如くにして、恰も百味の珍に勝れり。加之天人花を捧げて來り、鬼神手を束ねて奉仕しける間、敢て虎狼悪獸の恐れなくして、却つて換骨羽化の仙人となる。これのみならず、此の谷の流れの末を汲んで飲みける民三百余家、皆病即消滅して不老不死の上寿じやうじゆを保てり。其の後時代推移つて、八百余年まで慈童猶少年の貌あつて、更に衰老の姿なし。魏の文帝のとき、彭祖と名を替へて、此の術を文帝に授け奉る。文帝之れを受けて菊花の杯を伝へて、万年の寿ことぶきをなさる。今重陽の宴これなり。それより後、皇太子位を天に受けさせ給ふ時、必ず先づ此の文を受持し給ふ。これに依つて普門品を當途王經とは申すなるべし。此の文我が朝に伝はり、代々の聖主御即

位の日必ずこれを受持したまふ。若し幼主の君践祚ある

時は、摂政先づこれを受けて、御治世の始めに必ず君

に授け奉る。此の八句の偈の文、三国伝来て、理世安

民の治略、除災与樂の要術となる。これ偏に穆王天馬の

徳なり。されば此の龍馬の来れる事、併しながら仏法

王法の繁昌宝祚長久の奇瑞に候べし。」と申されたりけ

れば、主上を始め参らせて、当座の諸卿悉く心に服し旨

を承つて、賀し申さぬ人はなかりけり。（後略）